

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第6219072号
(P6219072)

(45) 発行日 平成29年10月25日 (2017.10.25)

(24) 登録日 平成29年10月6日 (2017.10.6)

(51) Int. Cl.	F 1
A 6 1 K 8/9789 (2017.01)	A 6 1 K 8/9789
A 6 1 K 8/34 (2006.01)	A 6 1 K 8/34
A 6 1 Q 19/00 (2006.01)	A 6 1 Q 19/00

請求項の数 3 (全 7 頁)

(21) 出願番号	特願2013-134741 (P2013-134741)	(73) 特許権者	000113470
(22) 出願日	平成25年6月27日 (2013. 6. 27)		ポーラ化成工業株式会社
(65) 公開番号	特開2015-10043 (P2015-10043A)		静岡県袋井市愛野 1 2 3 4 番地
(43) 公開日	平成27年1月19日 (2015. 1. 19)	(74) 代理人	100100549
審査請求日	平成28年6月24日 (2016. 6. 24)		弁理士 川口 嘉之
		(74) 代理人	100126505
			弁理士 佐貫 伸一
		(74) 代理人	100131392
			弁理士 丹羽 武司
		(74) 代理人	100151596
			弁理士 下田 俊明
		(72) 発明者	宮城島 有紀
			静岡県静岡市駿河区弥生町 6-48 ポー
			ラ化成工業株式会社 静岡研究所内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 温感化粧料

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

バニルアルキルエーテルを化粧料全量に対して 0. 1 質量%～1 質量%と、トウガラシ抽出物を化粧料全量に対して固形分として 0. 0 0 1 質量%～0. 1 質量%と、バラ科の植物抽出物とを含有し、

前記バラ科の植物が、アロニア属アロニア・メラノカルパ (Aronia melanocarpa) 及び／又はキイチゴ属オニイチゴ (Rubus ellipticus) であることを特徴とする、温感化粧料。

【請求項 2】

バニルアルキルエーテルを構成するアルキル基が炭素数 1～4 のアルキル基であることを特徴とする、請求項 1 に記載の温感化粧料。

【請求項 3】

バラ科の植物抽出物を化粧料全量に対して、固形分として 0. 0 0 0 1 質量%～1 質量%含有することを特徴とする、請求項 1 又は 2 に記載の温感化粧料。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0 0 0 1】

本発明は、温感化粧料に関し、さらに詳細にはバニルアルキルエーテルと、トウガラシ抽出物と、バラ科の植物抽出物とを含有することを特徴とする、温感化粧料に関する。

【背景技術】

10

20

【0002】

温感剤のバニリルアルキルエーテルは、他の温感剤に比べて温感の持続効果が高いため、温感化粧品に汎用されている（例えば、特許文献1、特許文献2を参照）。しかしながら、使用直後から温感を感じるまでのタイムラグがあるため、バニリルアルキルエーテル単独では効果に対する満足度がなかなか得られていなかった。

【0003】

一方、即効性の高い温感剤としてトウガラシ抽出物が知られており、バニリルアルキルエーテルと併用した温感化粧品も知られている（例えば、特許文献3を参照）。しかしながら、トウガラシ抽出物の温感ピークの時間とバニリルアルキルエーテルの温感効果が最大になる時間にまだズレが存するため、温感の中だるみが生じるという課題が存した。

10

【0004】

【特許文献1】特表2008-542387号公報

【特許文献2】特開2002-179517号公報

【特許文献3】特開2004-161709号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

本発明は、この様な状況下為されたものであり、バニリルアルキルエーテルと、トウガラシ抽出物とを含有する温感化粧品において、バラ科の植物抽出物を含有する化粧料を提供することを課題とする。

20

【課題を解決するための手段】

【0006】

この様な状況に鑑みて、本発明者らは鋭意努力を重ねた結果、バニリルアルキルエーテルと、トウガラシ抽出物とを含有する温感化粧品において、バラ科の植物抽出物を含有せしめることが、温感化粧品使用直後の温感の中だるみを抑える効果に優れることを見出し、発明を完成させるに至った。即ち、本発明は以下に示すとおりである。

<1>温感剤としてバニリルアルキルエーテルを化粧料全量に対して0.1質量%~0.5質量%と、トウガラシ抽出物を化粧料全量に対して0.001質量%~0.1質量%とを含有する温感化粧品において、バラ科の植物抽出物を含有することを特徴とする、温感化粧品。

30

<2>前記バラ科の植物が、アロニア属アロニア・メラノカルパ (*Aronia melanocarpa*) 及び／又はキイチゴ属オニイチゴ (*Rubus ellipticus*) であることを特徴とする、<1>に記載の温感化粧品。

<3>バラ科の植物抽出物を化粧料全量に対して、固形分として0.0001質量%~1質量%含有することを特徴とする、<1>又は<2>に記載の温感化粧品。

【発明の効果】

【0007】

本発明によれば、バニリルアルキルエーテルと、トウガラシ抽出物とを含有する温感化粧品において、バラ科の植物抽出物を含有せしめ、温感化粧品使用直後の温感の中だるみを抑える効果に優れた化粧料を提供することができる。

40

【発明を実施するための最良の形態】

【0008】

<本発明のバニリルアルキルエーテル>

本発明の温感化粧品は、必須成分としてバニリルアルキルエーテルを含有することを特徴とする。バニリルアルキルエーテルを構成するアルキル基としては、炭素数1~4のものが好ましく、例えば、バニリルメチルエーテル、バニリルエチルエーテル、バニリルプロピルエーテル、バニリルイソプロピルエーテル、バニリルブチルエーテル、バニリルセカンダリーブチルエーテル、バニリルイソブチルエーテル、バニリルターシャリーブチルエーテル、バニリルシクロプロピルメチルエーテル、バニリルシクロブチルエーテル等が具体的に好ましく例示できる。この内、バニリルブチルエーテルは、既に市販されており

50

それを用いることもできるし、バニルアルコールを塩化チオニルなどのハロゲン化剤でハロゲン化した後、水素化ナトリウムなどのアルカリ存在下対応するアルコールと縮合させて製造し、使用することもできる。バニルアルキルエーテルの含有量は、化粧料全量に対して、0.1質量%～1質量%であり、好ましくは0.1質量%～0.5質量%である。これは、少なすぎると温感効果が弱くなり、多すぎるとバニルアルキルエーテルの刺激性が強くなり使用性が低下するからである。本発明の化粧料においては、バニルアルキルエーテルを唯一種含有させることもできるし、二種以上組み合わせて含有させることもできる。好ましい形態は、バニルブチルエーテルを単独で含有する形態である。

【0009】

＜本発明のトウガラシ抽出物＞

本発明の温感化粧料は、必須成分としてトウガラシ抽出物を含有することを特徴とする。これら植物抽出物は、化粧品においては保湿効果、美白効果、鎮静効果といった働きをもつことから、肌のさまざまな代謝を活性化させる目的に汎用される成分である。ここでいう抽出物とは、具体的には、抽出物自体、抽出物の画分、精製した画分、抽出物又は画分の総称を意味する。

【0010】

本発明のトウガラシ抽出物としては、ナス科トウガラシの果実の乾燥物を有機溶剤で抽出したもの又はその溶剤除去物が好ましく、有機溶剤としては水に可溶なものが好ましく、エタノールやイソプロパノール、1,3-ブタンジオールなどのアルコールが特に好ましい。抽出は植物体に1～10倍量の溶媒を加え、室温であれば数日間、沸点付近の温度であれば数時間浸漬すればよい。必要に応じて濾過して不溶物を取り除いた後、所望により減圧濃縮などにより溶媒を除去することができる。本発明の温感化粧料における、トウガラシ抽出物の含有量は、化粧料全量に対して、固形分として0.001～0.1質量%であり、好ましくは0.005～0.05質量%である。これは、少なすぎると即時的な温感効果が発揮できない場合があり、多すぎると刺激感が強すぎる場合があるからである。

【0011】

＜製造例1＞

1) トウガラシの果実の乾燥物を200g秤取り、4lの70%含水エタノール水溶液を加え、ホモジナイザーでホモジナイズ処理を行い、室温で2時間浸漬し、不溶物を濾過して取り除いた後、減圧濃縮し、約1lの水溶液とした。

2) この様にして得た水溶液に酢酸エチル1lを加え、液液抽出を行った。同様の抽出操作を、さらに2回行った。各溶媒相を合わせ、減圧濃縮し、トウガラシの抽出物1.8gを得た。

【0012】

＜本発明のバラ科の植物抽出物＞

本発明の温感化粧料は、必須成分としてバラ科の植物抽出物を含有することを特徴とする。本発明におけるバラ科の植物抽出物としては、アロニア属及び／又はキイチゴ属の植物であることが好ましく、トウガラシ抽出物による即時的な温感効果と、バニルアルキルエーテルによる持続的な温感効果の間の中だるみを埋める効果を最も高めるためには、アロニア属及びキイチゴ属の植物を含有することがさらに好ましい。さらに、アロニア属の植物はアロニア・メラノカルパ (*Aronia melanocarpa*)、キイチゴ属の植物はオニイチゴ (*Rubus ellipticus*) が特に好ましい。抽出物の作製に用いる植物部位には、特段の限定がなされず、全草を用いることができるが、もちろん、植物体、地上部、根茎部、木幹部、葉部、茎部、花穂、花蕾、果実等の部位のみを使用することも可能である。特に好ましくは、アロニア・メラノカルパにおいては果実部が、オニイチゴにおいては根茎部が例示できる。該植物抽出物としては、圧搾流出物、水蒸気蒸留物、蒸留物、溶媒抽出物何れも使用可能であるが、溶媒抽出物が、有用成分を選択的に得ることができるので特に好ましい。溶媒抽出に用いる溶媒としては、極性溶媒が好ましく、例えば、水、1,3-ブタンジオール、エタノール、イソプロパノールなどのアルコール類、酢酸エチル、蟻酸メチ

ルなどのエステル類、アセトン、メチルエチルケトンなどのケトン類、ジエチルエーテルやテトラヒドロフランなどのエーテル類などが好ましく例示でき、中でも1, 3-ブタンジオール及び／又はエタノールを含有する水溶液が好ましく例示できる。このときの含有量は、溶媒全量に対して50質量%～95質量%が好ましく、60質量%～90質量%がさらに好ましい。抽出は、植物体又はその乾燥物1質量部に対して、1質量部～10質量部の溶媒を加え、室温であれば数日間、沸点付近の温度であれば数時間浸漬すればよい。必要に応じて不溶物を濾過して取り除いてもよい。濃縮する場合には、減圧留去すればよい。本発明の温感化粧料における、バラ科の植物抽出物の好ましい含有量は、化粧料全量に対して、固形分として0.0001～1質量%であり、さらに好ましくは0.001～0.1質量%である。これは、少なすぎるとトウガラシ抽出物による即時的な温感効果と、バニリルアルキルエーテルによる持続的な温感効果の間の中だるみを埋める効果が発揮できない場合があり、多すぎるとその効果が頭打ちになる場合があるからである。かかる植物抽出物は、上記のように調製して用いることもできるし、既に市販されているものを購入して用いることもできる。

10

【0013】

<製造例2>

1) アロニア・メラノカルパの果実の乾燥物を200g秤取り、4lの70%含水エタノール水溶液を加え、ホモジナイザーでホモジナイズ処理を行い、室温で2時間浸漬し、不溶物を濾過で取り除いた後、減圧濃縮し、約1lの水溶液とした。

2) この様にして得た水溶液に酢酸エチル1lを加え、液液抽出を行った。同様の抽出操作を、さらに2回行った。各溶媒相を合わせ、減圧濃縮し、アロニア・メラノカルパの抽出物2.4gを得た。

20

【0014】

<製造例3>

1) オニイチゴの根茎部の乾燥物を200g秤取り、4lの80%含水エタノール水溶液を加え、ホモジナイザーでホモジナイズ処理を行い、室温で2時間浸漬し、不溶物を濾過で取り除いた後、減圧濃縮し、約1lの水溶液とした。

2) この様にして得た水溶液に酢酸エチル1lを加え、液液抽出を行った。同様の抽出操作を、さらに2回行った。各溶媒相を合わせ、減圧濃縮し、オニイチゴの抽出物1.5gを得た。

30

【0015】

<本発明の温感化粧料>

本発明の温感化粧料としては、通常化粧料として知られているものであれば、特段の限定なく適用でき、例えば、化粧水、乳液、クリーム、エッセンス、パック、マッサージなどの基礎化粧料、ファンデーション、アンダーメイクアップ、リップカラー、チークカラー等のメイクアップ化粧料、シャンプー、石鹸、リンスなどの洗浄用の化粧料、ヘアローション、ヘアクリームなどの毛髪用の化粧料等が例示でき、中でも基礎化粧料が好ましく、マッサージ化粧料が特に好ましい。これは使用形態における擦過作業が本発明の効果を高めるからである。

【0016】

本発明の温感化粧料は、化粧料で通常使用されている任意成分を本発明の効果を損なわない範囲において、含有することができる。このような任意成分としては、例えば、マカデミアナッツ油、アボカド油、トウモロコシ油、オリーブ油、ナタネ油、ゴマ油、ヒマシ油、サフラワー油、綿実油、ホホバ油、ヤシ油、パーム油、液状ラノリン、硬化ヤシ油、硬化油、モクロウ、硬化ヒマシ油、ミツロウ、キャンデリラロウ、カルナウバロウ、イボタロウ、ラノリン、還元ラノリン、硬質ラノリン、ホホバロウ等のオイル、ワックス類、流動パラフィン、スクワラン、プリスタン、オゾケライト、パラフィン、セレシン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス等の炭化水素類、オレイン酸、イソステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、ベヘン酸、ウンデシレン酸等の高級脂肪酸類、セチルアルコール、ステアリルアルコール、イソステアリルアルコール

40

50

、ベヘニルアルコール、オクチルドデカノール、ミリスチルアルコール、セトステアリルアルコール等の高級アルコール等、ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、ジフェニルポリシロキサン等の鎖状ポリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、ドデカメチルシクロヘキサシロキサン等の環状ポリシロキサン、アミノ変性ポリシロキサン、ポリエーテル変性ポリシロキサン、アルキル変性ポリシロキサン、フッ素変性ポリシロキサン等の変性ポリシロキサン等のシリコーン油等の油剤類、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、乳酸、乳酸ナトリウム等の保湿成分類、グアガム、クインスシード、カラギーナン、ガラクトタン、アラビアガム、ペクチン、マンナン、デンプン、キサンタンガム、カードラン、メチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、メチルヒドロキシプロピルセルロース、コンドロイチン硫酸、デルマトン硫酸、グリコーゲン、ヘパラン硫酸、ヒアルロン酸、ヒアルロン酸ナトリウム、トラガントガム、ケラタン硫酸、コンドロイチン、ムコイチン硫酸、ヒドロキシエチルグアガム、カルボキシメチルグアガム、デキストラン、ケラト硫酸、ローカストビーンガム、サクシノグルカン、カロニン酸、キチン、キトサン、カルボキシメチルキチン、寒天、ポリビニルアルコール、ポリビニルピロリドン、カルボキシビニルポリマー、ポリアクリル酸ナトリウム、ポリエチレングリコール等の増粘剤、表面を処理されていても良い、マイカ、シリカ、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、酸化アルミニウム、硫酸バリウム等の粉体類、表面を処理されていても良い、ベンガラ、黄酸化鉄、黒酸化鉄、酸化コバルト、群青、紺青、酸化チタン、酸化亜鉛の無機顔料類、表面を処理されていても良い、雲母チタン、魚鱗箔、オキシ塩化ビスマス等のパール剤類、レーキ化されていても良い赤色202号、赤色228号、赤色226号、黄色4号、青色404号、黄色5号、赤色505号、赤色230号、赤色223号、橙色201号、赤色213号、黄色204号、黄色203号、青色1号、緑色201号、紫色201号、赤色204号等の有機色素類、ポリエチレン末、ポリメタクリル酸メチル、ナイロン粉末、オルガノポリシロキサンエラストマー等の有機粉体類、パラアミノ安息香酸系紫外線吸収剤、アントラニル酸系紫外線吸収剤、サリチル酸系紫外線吸収剤、桂皮酸系紫外線吸収剤、ベンゾフェノン系紫外線吸収剤、糖系紫外線吸収剤、2-(2'-ヒドロキシ-5'-テオクチルフェニル)ベンゾトリアゾール、4-メトキシ-4'-テブチルジベンゾイルメタン等の紫外線吸収剤類、ビタミンA又はその誘導体、ビタミンB₆塩酸塩、ビタミンB₆トリパルミテート、ビタミンB₆ジオクタノエート、ビタミンB₂又はその誘導体、ビタミンB₁₂、ビタミンB₁₅又はその誘導体等のビタミンB類、 α -トコフェロール、 β -トコフェロール、 γ -トコフェロール、ビタミンEアセテート等のビタミンE類、ビタミンD類、ビタミンH、パントテン酸、パンテチン、ピロキノリンキノン等のビタミン類等、フェノキシエタノール等の抗菌剤等、アルブチン、アスコルビン酸誘導体、レゾルシン誘導体、コウジ酸、トラネキサム酸等の美白剤、レチノール、ウルソール酸誘導体等の抗シワ改善剤等が好ましく例示できる。これらの中では、より好ましいマッサージ化粧料の態様においては、さらに、アルキル変性カルボキシビニルポリマー及び／又はそれらの塩を含有することが好ましい。かかる成分を含有することにより、温感効果が持続するからである。これらのカルボキシビニルポリマーは、増粘剤として種々のものが市販されているので、それらを購入して使用することができる。アルキル変性カルボキシビニルポリマーは、カルボキシビニルポリマーの一部にアルキル基を導入したもので、例えばグッドリッチ社(米)より「ペミレンTR-1」、「ペミレンTR-2」、「カーボポール1382」等が市販されている。又、アルキル変性カルボキシビニルポリマーを使用する際には、水中油型の乳化剤形にするのが、温感効果がさらに持続するため好ましい。

【0017】

以下に、実施例を挙げて、本発明について更に詳細に説明を加えるが、本発明が、かかる実施例にのみ限定されないことはいふまでもない。

【実施例】

【0018】

<実施例1~9>

10

20

30

40

50

下記に示す表1の処方に従って、本発明の温感化粧料である、マッサージ化粧料を作製した。即ち、表1の(イ)を混合し75℃に加温、これに混合後75℃に加温した(ロ)を添加・攪拌、さらに混合後75℃に加温した(ハ)を添加・攪拌し、中和した。攪拌しながら冷却し、(ニ)をさらに添加・攪拌し、本発明のマッサージ化粧料である実施例1～9を得た。同様に操作して、バラ科の植物抽出物を水に置換した比較例1も作製した。

【0019】

【表1】

	質量%								
	実施例1	実施例2	実施例3	実施例4	実施例5	実施例6	実施例7	実施例8	実施例9
(イ)									
1,3-ブチレングリコール	8	8	8	8	8	8	8	8	8
ポリエチレングリコール	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
フェノキシエタノール	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
水	70.144	70.144	70.143	70.135	70.135	69.794	69.794	70.099	70.099
「ベミレンTR-2」	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
(ロ)									
ジメチコン	15	15	15	15	15	15	15	15	15
ベヘニルアルコール	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
POEポリグリセリンステアリエーテル	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
ソルビタンセスキステアレート	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
POEステアリエーテル	1	1	1	1	1	1	1	1	1
(ハ)									
1%水酸化カリウム水溶液	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
(ニ)									
1,3-ブチレングリコール	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
製造例1のトウガラシ抽出物	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.05	0.05
製造例2のアロニア・メラノカルパ抽出物	0.001		0.001	0.01		0.001		0.001	
製造例3のオニイチゴ抽出物		0.001	0.001		0.01		0.001		0.001
バニリルブチルエーテル	0.15	0.15	0.15	0.15	0.15	0.5	0.5	0.15	0.15

【0020】

<試験例：温感評価試験>

実施例1～3及び比較例1をパネラーの前腕内側に塗布し、塗布直後、塗布3分後、5分後、7分後、10分後に温感を感じるかどうかを自己申告させた。各実施例、各比較例について、5名のパネラーで評価を行い、温感を自己申告したパネラーの割合を%で示した。結果を表2に示す。さらに、温感の強さを、かなり温感を感じる：5点、温感を感じる：4点、やや温感を感じる：3点、わずかに温感を感じる：2点、ほとんど温感を感じない：1点、全く温感を感じない：0点の6段階でスコア評価してもらい、5名のスコアの平均値をその時間における温感スコアとした。結果を表2に示す。

【0021】

【表2】

		塗布直後	塗布3分後	塗布5分後	塗布7分後	塗布10分後
実施例1	温感を感じる率	100	100	100	100	100
	温感スコア	5	4.4	4.8	5	5
実施例2	温感を感じる率	100	100	100	100	100
	温感スコア	5	4.2	4.4	4.8	5
実施例3	温感を感じる率	100	100	100	100	100
	温感スコア	5	4.8	5	5	5
比較例1	温感を感じる率	100	20	40	60	100
	温感スコア	5	0.4	0.8	1.8	3.6

【0022】

表2の結果より、本発明の温感化粧料は、トウガラシ抽出物による即時的な温感効果と、バニリルアルコールによる持続的な温感効果の間の中だるみを埋める効果があり、満足度の高い温感化粧料が設計されていることが判る。さらに、アロニア・メラノカルパ抽出物と、オニイチゴ抽出物の両方を含有した実施例3が最も効果が高いことが判る。

10

20

30

40

フロントページの続き

審査官 駒木 亮一

(56)参考文献 特開2004-161708 (JP, A)
特開2008-074767 (JP, A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
A61K 8/00-8/99
A61Q 1/00-90/00